

沖縄観光5年間の飛躍

2011～2015年の観光データ比較

ここ数年の沖縄観光の躍進はめざましく、さまざまな取り組みによりハード、ソフト全ての分野が大きく発展してきた。本稿では、中期的な視点で2011～2015年のデータを比較し、沖縄観光5年間の変化について概観したい。

外国客が5.4倍に増加

入域観光客数は全体で11年の541.6万人から15年では776.3万人と、43%の伸びとなっている。内訳をみると、国内客は11年513.6万人から15年626.2万人へ増加し22.0%の伸び、外国客は28.0万人から150.1万人と5.4倍に飛躍している。ちなみに外国客の増加が著しいことから、全観光客数における外国客の比率も上昇し、11年の5.2%から15年19.3%となっている。このように沖縄旅行は、外国客を中心にニーズが高まったことがわかる。

図表1：入域観光客数

	2011年 (万人)	2015年 (万人)	伸び率 (2015年/2011年)	
全体	総数	541.6	776.3	143%
	国内客	513.6	626.2	122%
	外国客	28.0	150.1	536%
空路	総数	526.7	729.9	139%
	国内客	510.4	622.2	122%
	外国客	16.4	107.7	658%
海路	総数	14.8	46.4	313%
	国内客	3.2	4.0	127%
	外国客	11.6	42.4	364%

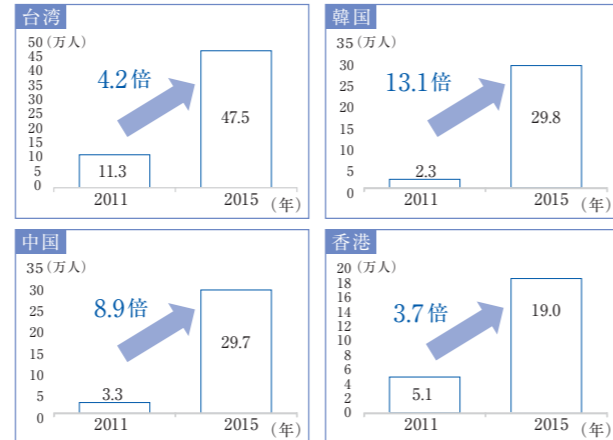
(出所) 沖縄県 入域観光客統計を基に作成

特に増加が著しい外国人観光客について、国(地域)別の内訳をみたい。海外主要市場(台湾、韓国、中国、香港)からの入域状況は、いずれも大幅に増加しており、台湾(320.3%増)、韓国(1,212.3%増)、中国(798.5%増)、香港(270.5%増)となっている。

この数年の外国客の増加により、観光客受入の様相は一変しており、国際通りでは、外国でニーズの高い医薬品や健

康関連商品を扱うドラッグストアが急増、土産店や飲食店においても外国語に翻訳したPOPが設置され始めた。観光客を対象とする多くのサービスで、外国語対応のホームページも増えた。外国客を案内する通訳案内士等も、149人から531人にまで増えている(沖縄県観光政策課)。このように、外国客需要の取り込みに向け、外国客対応の重要性が非常に高まっている状況が今も続いている。

図表2：主要海外路線からの外国客数



(出所) 沖縄県 入域観光客統計を基に作成

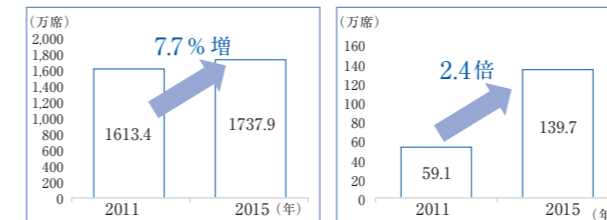
一次交通の状況

入域観光客数増加の背景には一次交通の拡充がある。航空路線における5年間の提供座席数推移をみると、国内線においては、11年1,613.4万席から15年1,737.9万席へ、7.7%の増加となっている。海外路線はさらに顕著な伸びを見せており、59.1万席から139.7万席まで増加、136.5%増と2倍以上となっている。

利用者の増加により、2011年頃から那覇空港国際線で

は、さまざまな弊害が生じていた。ホールは搭乗手続きと保安検査の行列で埋まり、1時間ほど並んだあとの搭乗待合室にはベンチも足りず、飛行機に乗るまで長時間立ったままで待たなければならないといった状況がみられた。このような状況もあり、2014年2月に新国際線ターミナルが開設。現在では、保安検査機器が増設され、搭乗待合室も拡大されるなどで多くの課題が改善されている。

図表3：那覇空港発着国内線提供座席数 図表4：那覇空港国際線提供座席数



※国際線の提供座席数は、一部の航空会社のデータが含まれていない参考値
(出所) 県・観光要覧および那覇空港 HP を基に作成

提供座席が特に大きく増加している国際路線では、この5年で就航都市が6都市から10都市へ増加、参入航空会社は8社から16社へと増加、特にLCC(格安航空会社)の参入が顕著である。就航便数は週45便から143便まで大幅拡大している。

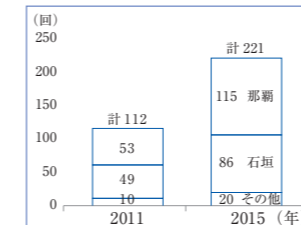
図表5：那覇空港の就航国際路線と航空会社数

	2011年	2016年(9月1日時点)
就航都市	6都市 中国(上海、北京)、台湾(台北)、韓国(ソウル)、香港、グアム	10都市 中国(上海、杭州、北京、天津)、台湾(台北、台中、高雄)、香港、韓国(ソウル、釜山)
航空会社	7社 中華航空、アジアナ航空、香港エクスプレス航空、香港ドラゴン航空、中国東方航空、エバー航空、トランスアジア航空、ユナイテッド航空、	16社 中華航空、アジアナ航空、香港航空、香港ドラゴン航空、中国東方航空、エバー航空、トランスアジア航空、天津航空、大韓航空 (以下はLCC)イースター航空、ジンエア、チェジュ航空、ティーウェイ航空、吉祥航空、マンダリン航空、タイガーエア、ピーチアビエーション、バニラエア
就航便数	週45便	週143便

(出所) 県・観光要覧および那覇空港 HP を基に作成

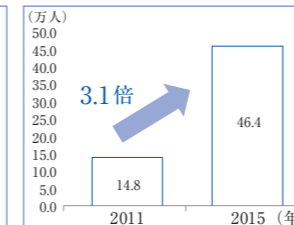
近年はクルーズ客の増加も顕著だ。クルーズ船の寄港回数は、2011年の112回から、15年には221回と、2倍に増加。また、クルーズ船による入域客も14.8万人から46.4万人へ213.5%増と、3倍以上に増加している。

図表6：クルーズ船寄港回数



(出所) 沖縄総合事務局

図表7：クルーズ船客数



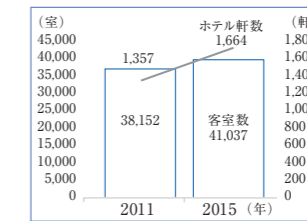
※特例上陸社を含む
(出所) 県・観光政策課資料を基に作成

クルーズ船の寄港回数を受け、クルーズ船ターミナルも2014年3月に開設している。それまでは大型観光客船が寄港した際に、出入国検査に大幅な時間がかかるなど、観光客から不満の声が上がっていた。新ターミナルでは、税関検査台4台などを設置したほか、クルーズ船とつなぐボーディングブリッジも備えられている。

宿泊施設と宿泊客数動向

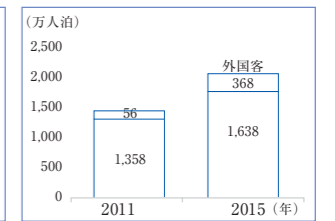
次に受け入れの要ともいえる宿泊施設の状況をみていく。県内における延べ宿泊客数は、国内客で11年の1,358万人泊から15年1,638万人泊へと推移し、20.7%増加した。外国客は、56万人泊から368万人泊と557%の大幅増だ。宿泊施設軒数をみると、11年1,357軒から15年1,664軒と22.7%の増加、客室数は38,152室から41,037室まで増え、8.7%の増加となっている。なお、この期間の県内主要ホテル客室稼働率は11年66.1%から15年80.8%へと上昇している(日本銀行那覇支店県内金融経済概況発表)。

図表8：県内客室数とホテル軒数推移



(出所) 県・観光政策課資料を基に作成

図表9：県内延べ宿泊数推移



(出所) 観光庁 宿泊旅行統計調査

ここ最近でも宿泊施設の多くの建設計画が進んでいることから、今後もさらに客室のキャパシティが増加するとみられる。また、2008年に開設した民泊サイト「Airbnb」の利用が近年活発になっており、県内でも300室以上の部屋が客室として登録されているなど、新たな宿泊の受け皿も生まれている。

現状の趨勢は引き続き継続

今後、2020年の東京オリンピック開催により、さらなる需要増加が期待され、また、那覇空港第二滑走路が共用開始されれば、観光客数はさらに増加すると考えられる。県の策定した観光ロードマップにおいても、今後の需要を見越した各種取り組みが計画されており、第5次沖縄県観光振興基本計画で掲げられた観光客数1000万人(うち国内客800万人、外国客200万人)の目標達成も、目前といえるだろう。

沖縄観光の5年間をみると、特に外国客の増加と、これに対するハード・ソフトの取り組みが際立った。現状を考慮すると、この趨勢はさらに継続していくとみられる。沖縄観光は今後も、さらなる変化に対応していくことが求められるだろう。

(海邦総研 地域経済調査部 瀬川孫秀)